

「イスラム国」という名称

白杵 陽

「イスラム国」による日本人質殺害事件から一ヶ月余りが経過した。これまでになかった興味深い現象として、日本の一部のメディアにおいて「イスラム国」という表現が消えて、「IS」といった英語の表記を始めたことである。その理由は「イスラム国」は国家ではなく過激派テロリスト組織であり、「イスラーム」を標榜しているが、敬虔なイスラーム教徒から見ればイスラームとテロリズムを混同するもので、イスラームにとっては迷惑千万だからだということらしい。

中東地域研究に携わる者としてはこのような呼称をめぐる議論はきわめて重要な問題を提起していると思う。特定の名称を使用する者の認識が問われることになるからである。アラビア語メディアは「イスラム国」のことを「イラク・シャーム・イスラーム国」のアラビア語の頭文字をとった「ダーイシュ」という表現を使っている。「イスラム国」自身はこの「ダーイシュ」という呼び名を嫌がっていると報じられている。逆にアラブ諸国の政府やメディアなどでは侮蔑語であるがゆえにかえって好んで使用されている。

他方、英語の略語である「ISIS」だと古代エジプトの神々の最高位の女神イシスと同じ綴り字になって凶暴なテロ集団にはそぐわないということ、米国政府や日本政府などは「ISIL」をむしろ積極的に使っている。ただ、この用語の「L」は「レヴァント (Levant)」の頭文字である。レヴァントは地中海東岸地域を指し、もともとの「ISIS」の最後の「S」の「シャーム」は現在のシリア・レバノン・ヨルダン・イスラエル・パレスチナ自治区の全域を指す「大シリア」「歴史的シリア」を意味するアラビア語である。つまり、地域概念としては後者の方が前者より内陸部まで示すので広い地域を含んでいるということになる。したがって、「ISIL」は不正確な略称ということになるが、両国政府ともそれを承知の上で「ISIS」ではなく、あえてこの「ISIL」を使用しているのであろう。ただし、フランス政府はアラビア語にならって「ダーイシュ」を正式に使用している。

ところで、「ダーイシュ」というアラビア語をアラビア語学習者がよく使っている『ハンス・ヴェア・アラビア語・英語辞典』で引いてみる。この単語の三語根(アラビア語は三つの子音字から構成されているので、辞書での見出し語はこの三語根で引かなければならない)は「ダール」「アイン」「シイン」であるが、この単語は見当たらない。しかし、一番近い単語としては三番目の子音字が「スイーン」であれば似た単語はある。文字としては三点(∴)が付いているか、いないかの違いだけである。三点がない方の単語の主な意味は to tread underfoot, to knock down, run over (someone; automobile) である。つまり、「踏み潰す、殴り倒す、轢き殺す」となるのである。アラビア語を知っている人はここでなるほどと思うことだろう。というのも、「ダーイシュ」は文法的には現在分詞のかたちになるので、一人称が主語だとすると「我々は連中を踏み潰す」などの意味になるのである。「イスラム国」の連中が「ダーイシュ」と呼ばれるのを嫌がるはずである。

地域などの呼称の問題は地域研究者にとっては、どの立場から対象となる地域を見るかということに関わっているので、実に深刻な問題である。私自身の専門地域であるイスラエルあるいはパレスチナという地域名称のどちらを選択するかで立場が問われてしまうからである。もちろん、厳密に議論すれば、委任統治期パレスチナの領域が現在のイスラエルとパレスチナ自治区(ヨルダン川西岸・ガザ)を含む地域ということになる(ゴラン高原はパレスチナには含まれない)。私自身はむしろ地名の歴史性をも加味して「パレスチナ/イスラエル」という表現をもっぱら使用することになっている。

さらに、自称であるのか、他称であるのかの問題も加わる。パレスチナ自治区においてヨルダン川

西岸とガザの支配をめぐる争っているファタハもハマースも同じくアラビア語名称の頭文字の略である。ファタハは「勝利、征服」、ハマースは「情熱」などといったプラスイメージの意味があり、そもそも両者ともども自称である。

いずれにせよ、「イスラム国」の呼称が国際社会に問いかけている問題は深刻である。というのも、テロリストが「国家」を建設して、それが既成事実化した時に国際社会はどう対応するかという態度決定が迫られるからである。もちろん、現在でも「未承認国家」という未解決の問題が第一次世界大戦後に解体した旧帝国領の版図内には数多くある。「イスラム国」というやっかいな問題も今、英仏によって恣意的に引かれた旧オスマン帝国領内の主権国家の国境線が溶解しつつあるという中東政治の現実を国際社会がどう捉えるのかを問いかけているのである。

〔表紙写真〕

インドネシア総選挙で立候補者の演説に耳を傾ける住民（二〇一四年四月）

〔目次写真〕

東日本大震災の津波で宮城県気仙沼市鹿折地区に打ち上げられた第十八共徳丸（二〇一三年四月）

（いずれも西芳実撮影）